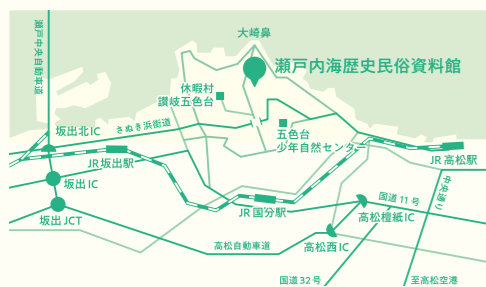
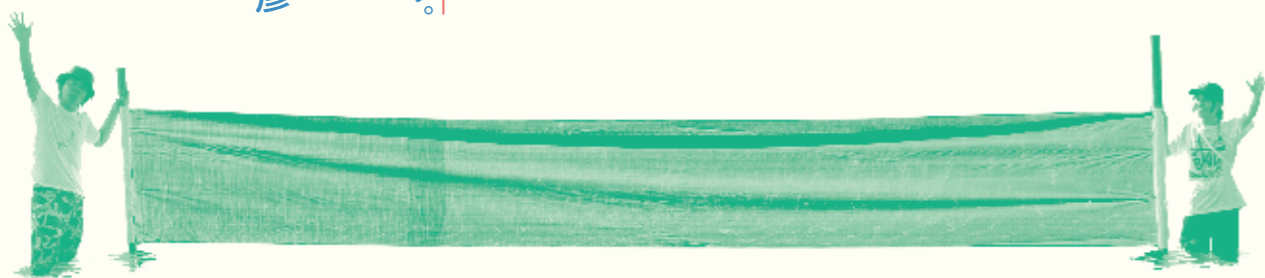


The ocean loves people
Setonaikai Bunka Project

うみを感じてくらししてみよう。
わたしたちがくらししている
足元の陸をずっと、ずっと、
たどっていくと海につながり、海中になり、
そのまま、ずっと、ずっととたどっていくと
地上の陸地は海底まで続いている。
わたしたちのくらしが
うみと繋がっていることをイメージしてみよう。
うみの中のくらしがわたしたちの足もとの
くらしと繋がっていることをイメージしてみよう。
うみを感じてくらししてみよう。

東京藝術大学長 日比野克彦



瀬戸内海歴史民俗資料館
Seto Inland Sea Folk History Museum

〒761-8001 高松市亀水町 1412-2 (五色台山上)
Tel: 087-881-4707 (FAX: 087-881-4784)
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/

- JR高松駅から：車で約25分 ■JR坂出駅から：車で約30分
- 徳島方面から：高松自動車道権紙ICより車で約30分
- 岡山方面から：瀬戸中央自動車道坂出北ICより車で約30分
- 愛媛・高知方面から：高松自動車道坂出北ICより車で約35分
- ※いずれも県道高松王越坂出線の犬崎鼻経由
- 駐車場：普通車30台、大型バス可

香川県・東京藝術大学連携事業とは

香川県では、平成13年度から東京藝術大学と連携し、地域の文化芸術を担う人材の育成や地域の活性化につなげるため、県内各所で現代美術の作品制作・展示やワークショップを展開してきました。また、平成30年には都道府県レベルでは初となる連携協定を結び、昨年度からは「瀬戸内海分校プロジェクト」を始動するなど、先進的な連携事業の充実に取り組んでいます。

主催：香川県、東京藝術大学 共催：香川大学
総合監修：東京藝術大学長 日比野克彦
事業代表者：東京藝術大学 美術学部長 光井 渉
企画・運営・講師：東京藝術大学 美術学部 教授 橋本 和幸
東京藝術大学 美術学部 准教授 西村 雄輔
香川大学 創造工学部 講師 柴田 悠基
特別講師：香川大学 創造工学部 学部長 末永 慶寛

[お問い合わせ]
香川県政策部文化芸術局文化振興課
Tel: 087-832-3785 (FAX: 087-806-0238)

<https://www.tua-kagawa.com/>

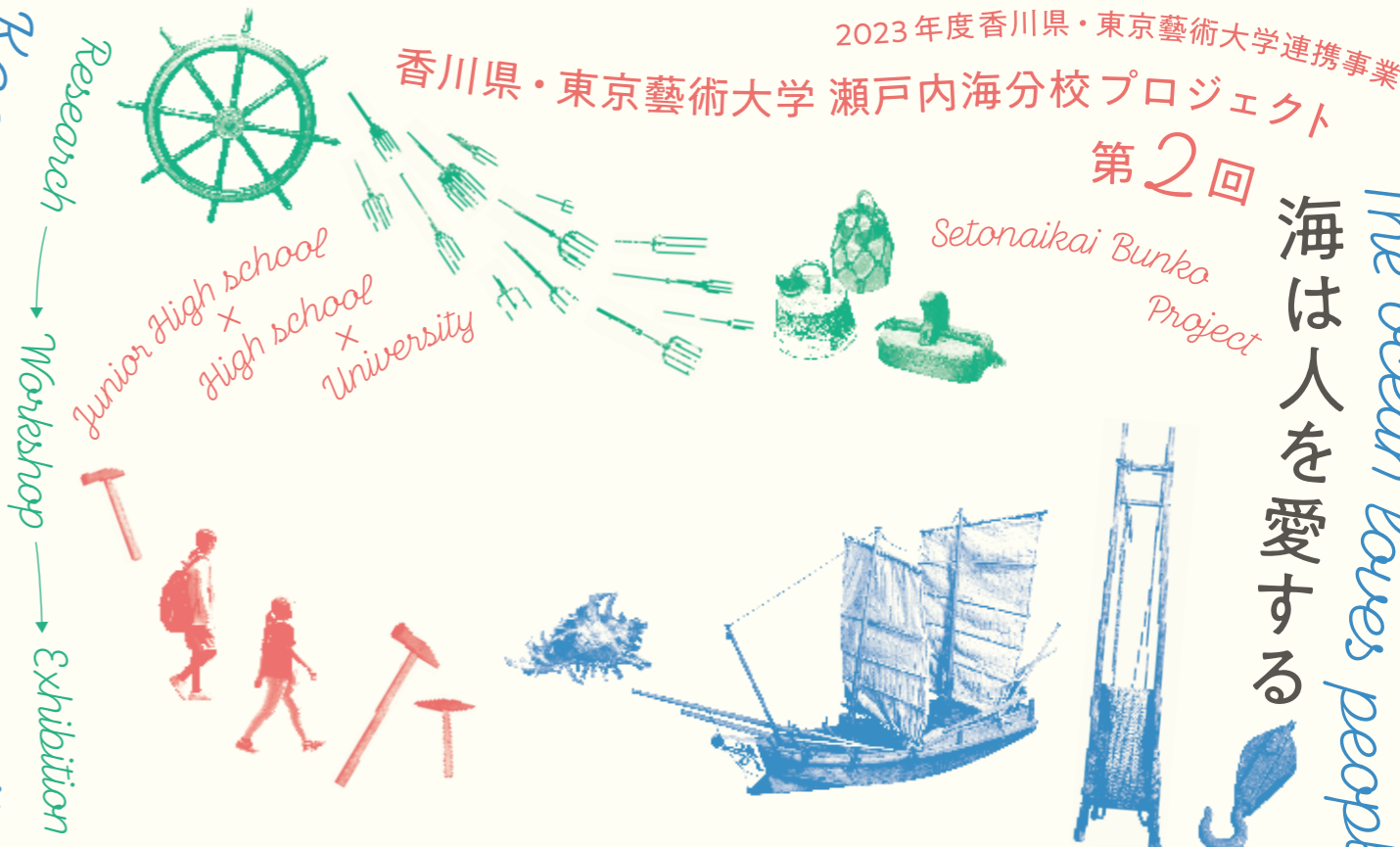


このプロジェクトで香川県と東京藝術大学は次のSDGsの取り組みに貢献し、香川大学(香川大学SDGs加速推進経費活用)と連携して開催します。

- 質の高い教育をみんなに
- 海の豊かさを守ろう
- 次の取り組みを促進することも目指します。
- 住み続けられるまちづくりを
- 陸の豊かさも守ろう
- パートナーシップで目標を達成しよう



Kagawa x Tokyo University of the Arts 2023



くらし うみ 展



Exhibiting Artists:
Izumi ITO & Yukari SAKATA
& Takashi HOKOI
& Shintaro MRYAWAKI

2023年度香川県・東京藝術大学連携事業

香川県・東京藝術大学 瀬戸内海分校プロジェクト
第2回
Setonaikai Bunka Project

The ocean loves people
海は人を愛する

令和5年 10月27日(金) - 11月26日(日)

9時 - 17時 (初日のみ15時より一般公開)
入館は16時30分まで 月曜日休館 入館無料

瀬戸内海歴史民俗資料館

くらし うみ 展
ロゴ画：日比野克彦



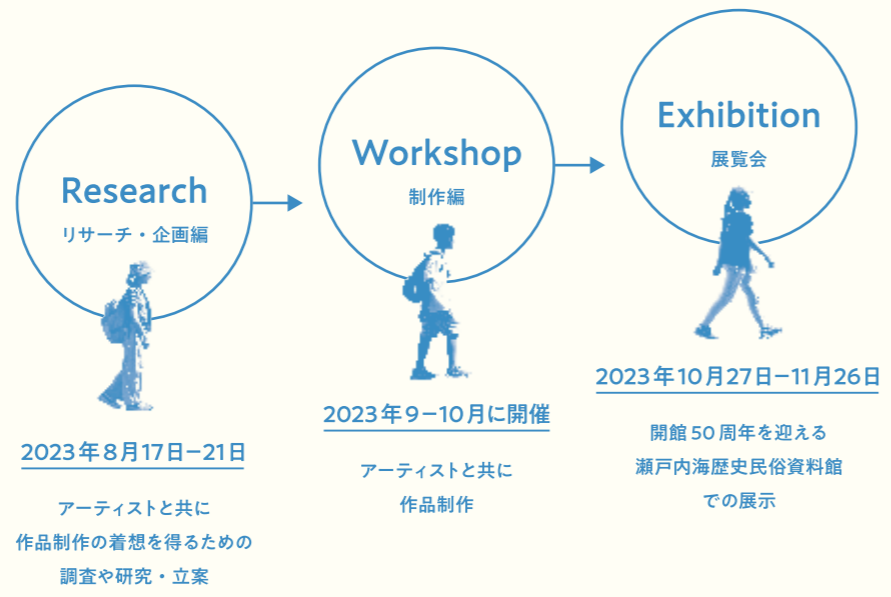
- 1. 瀬戸内海歴史民俗資料館付近の海岸
- 2. 宮脇チーム/本島リサーチ活動
- 3. 香川大の船による海洋調査
- 4. 坂田チーム/演劇リサーチ活動
- 5. 鈴木チーム/道具制作の検証
- 6. 伊東チーム/金山サスカイトリサーチ活動



- 7. 香川大の船による養場の観察
- 8. 伊東チーム/土器制作
- 9. 鈴木チーム/道具制作の様子
- 10. 瀬戸内海歴史民俗資料館の見学と講義
- 11. 12. 宮脇チーム/本島リサーチ活動
- 13. 日比野克彦学長による看板制作

アーティストが中高生・大学生らと共に「くらし⇄うみ」展をつくりあげます

海洋環境を想う「海は人を愛する」をメインテーマに昨年度から始まった「瀬戸内海分校プロジェクト」は、国内外で活躍しているアーティストと、中学生・高校生らがチームを組み、フィールドワークや作品制作、展示会の準備開催を行うことで、作品の企画立案から展示会開催に至るまでの一連の流れを実践的に学ぶプログラムです。今年度は「くらし⇄うみ」をサブテーマに、瀬戸内海とそこに暮らす人々の生活について考えを深めながら、展示会開催までのプロセスをアーティストとともに重ねてきました。その集大成となる「くらし⇄うみ」展を、今年開館50周年を迎える瀬戸内海歴史民俗資料館で開催します。



出展アーティスト

伊東五津美
IZUMI ITO



「くらし⇄うみ」展では「くらしのカタチ」をテーマに土器を制作し展示をします。瀬戸内海という環境、住んでいる場所、自分が感じる今の「くらし」について、捉えたことをカタチに起こしていきます。

1988年、千葉県生まれ。2021年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。2022年より同大学、絵画科油画教育研究助手として勤務。美術作家。自身の身体をメディアムとして捉え、場所を移動した先での視点や自然に介入した時の感覚をきっかけに、普段の生活との違いや時間軸の差異をテーマに制作をしている。主な展示に、2019年「瀬戸内国際芸術祭2019 秋会期」(公益財団法人 四国民家博物館「四国村」/香川)、2021年「第8回アラカルト」(船橋市民ギャラリー/千葉)、「芸術の散歩道」(上野公園/東京)、2022年「天空の芸術祭2022」(海野宿/長野県)、「USHIKU REDESIGN PROJECT OPENING」(市原牛久商店街/千葉)、「さとうみ展」(池戸公民館/香川)

坂田ゆかり
YUKARI SAKATA



瀬戸内海歴史民俗資料館のさまざまな展示品をキーアイテムとして、今と昔のくらしについて考えを交換し合いながら、香川県内の離れた場所を通信でつなぐ館内ツアー型パフォーマンスを制作します。

東京藝術大学音楽環境創造科卒業後、全国の劇場で舞台技術スタッフとして研鑽を積む。2014年、アルカサバ・シアター(パレスチナ)との共同創作『羅生門 藪の中』を演出(フェスティバル/トーキョー14)。2016年、建築家ホルヘ・マルティン・ガルシアと8名の高校生と共に制作した『Dear Gullivers』(瀬戸内国際芸術祭2016「複雑なトポグラフィ」展/特別名勝 栗林公園)は、2018年ロンドンでのアップデートを経て第16回ヴェネチア建築ビエンナーレのスペイン館に参加。2022年、International Theatre Institute (ITI/UNESCO)のWorld Theatre Dayにて、日本代表のエマージング・アーティストに選出。

鈴木喬
TAKASHI HOKOI



リサーチではくらしを道具と捉え「海岸で自然と対峙する道具」を中高生が考え制作しました。本展ではそのアイデアに作家がコラボレーションしワークショップでインスタレーションとして再構築します。

1984年神奈川県生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科修了。2016年から同大学デザイン科立体工房非常勤講師。学生時代に人力飛行機のパイロットとして空を飛び、わずかな風に翻弄された経験から風を可視化する作品を作り始める。その後カメラマンとしてNHKに就職し、東日本大震災では仙台平野を襲う津波をヘリから空撮中継。福島と東京の2拠点生活の傍ら地方芸術祭で滞在制作を行い、リサーチベースの基、自然とエネルギーの関係性をテーマに制作をしている。2020年 Vermont Studio Center Artist in Residence (USA)、SIM Artist in Residence Program (Iceland)、2021年野村財団芸術文化助成、中之条ビエンナーレ2023 (群馬県) など。

宮脇慎太郎
SHINTARO MIYAWAKI



人口減少に直面する両墓制の離島を実際に訪れ、そこで感じた島の魂と変わりゆく死生観の象徴として、暗室作業で大きな空撮写真を皆で作ります。プロセスやインタビュー映像も展示します。

1981年香川県高松市生まれ。大阪芸術大学写真学科卒業後、日本出版、六本木スタジオなどを経て独立。大学在学時より国内外への旅を繰り返したのち、2009年から高松を拠点に本格的な写真活動開始。辺境・辺縁で生きる人々や、マイノリティーが浮き彫りにする命の流れと聖性を追求。2022年にはリアス式海岸が続く南予沿岸地域を6年間撮影した『UWAKAI』を刊行。同年に初のノンフィクションとしてインドのゴアと屋久島、二つのヒッピーの聖地を旅した『流れゆくもの〜屋久島・ゴア〜』出版。2002年大阪芸大卒業制作展にてホースマン賞受賞。瀬戸内国際芸術祭公式カメラマン。2020年香川県文化芸術新人賞受賞。